

茨城郷土部隊の

戦時史料展概要について

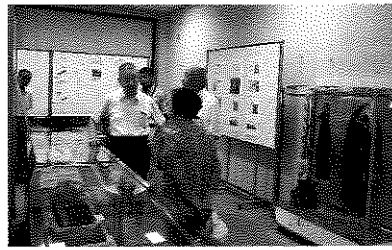
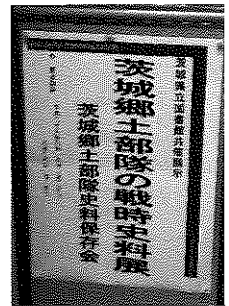
茨城偕行会 副会長
茨城郷土部隊史料保存会 理事
山根 峯治 陸自70

1 はじめに

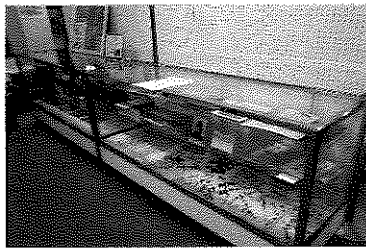
大東亜戦争を経験し、あるいは当時の状況を体験した方々が戦後72年を迎え、高齢化が著しく、先人の偉業を語り継ぎ、敬意を示す慰霊・顕彰碑等の維持継承も、各地で徐々に困難になっていると聞きます。茨城県では、昭和49年に「財団法人茨城郷土部隊史料保存会」が発足し、郷土部隊の史料を収集してきました。当初は戦争経験者等数多くの方々に組織されましたが、現在は「茨城郷土部隊史料保存会」(会長 鶴見和満陸自60 茨城偕行会公会員)が、わずか12名の任意団体として、県の補助を得ながら史料収集をしています。43年間で約1千点の貴重な史料を集めました。県に保管場所がなく、協定により応急的に陸上自衛隊勝田駐屯地の防衛館で保管し、一般見学者に対する史料展示と学生教育で使用して頂いております。

一般市民に向けて収集した貴重な史料を常設展示するには、史料の分析と語り部の存在が必要であり、なかなか

茨城県立図書館共催展示の案内版(県立図書館作成)



図書館1階ギャラリーの展示説明風景



ペリリュー島の戦闘史料展示風景

実現しませんでした。今年、鶴見会長以下会員の総力(ほとんどが茨城偕行会会員)を挙げて県と調整準備し、県立図書館1階ギャラリーで、8月9日から8月13日まで5日間、約1000点の史料と説明パネルなどを使って「茨城郷土部隊の戦時史料展」を行いました。約40年ぶりのことです。

展示会は事前に県の担当部局から各自治体に広報され、地元茨城新聞が史料展の開催を報道したこともあり、毎日多くの来場者がありました。「こんなに多くの部隊が茨城県にあったことを初めて知った。史料を見学して良かった。これを機会に正しく子供や孫に郷土部隊のことを語り継ぎたい」との話を聞き、会長以下苦労して開催してよかったと胸を撫でおろしました。また高齢の方で、戦争を体験された方の来場もあり、当時のことを色々と教えて頂きました。地方でこの種展示説明会をする意義が深いことを、改めて感じた次第です。

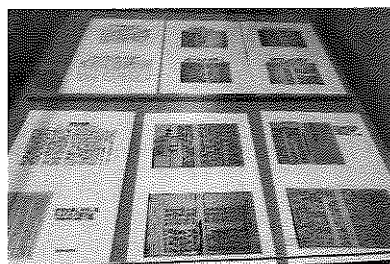
2 主な展示内容について

展示に当たっては、「茨城県終戦処理史」(昭和47年茨城県民生部世話課編)に記述されている内容を、茨城県つくば市にある「国立公文書館筑波分館」や「アジア歴史資料センター」の資料で事実確認し、概要をパネルにして説明するに努めました。また郷土部

隊については、「茨城県内陸海軍部隊配置概要図」(茨城県終戦処理史付図)にある所在地や、地元の方々の証言を基に現地調査を重ね、昭和22、24年頃に米軍が撮影した航空写真(国土地理院地図・空中写真閲覧サービス)と最近の航空写真や現地調査の写真を添え、比較して見ることが出来るようにしました。現地調査は、当時のことを承知している高齢の方がいなくなり、徐々に困難になりつつあります。その主な展示内容を紹介します。

(1) 茨城県終戦処理史に記述されている各種資料展示

開戦詔書、終戦詔書、終戦詔書と同時に配布された内閣告諭等を展示しました。この種の史実は、戦後の学校教育ではほとんど扱われていないため、国立公文書館で入手した写真コピーです。初めて読む方も多く、食い入るよ

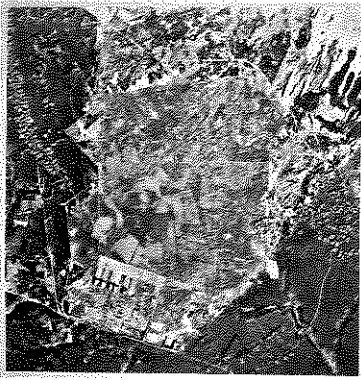


開戦詔書等の写真コピー展示

うに立ち止まっている人が多くいました。また、県内に多くの陸海軍部隊が国土防衛の為に配置されていたことに驚いていました。

(2) 茨城県にあった陸軍飛行場などの終戦直後の航空写真と現状の比較展示
自分たちが現在住んでいる場所の近傍に大東亜戦争当時どのような飛行場があり、陸軍航空部隊はいつ頃どこでどのような戦いに参加したのかを、判明しているものについて概要を説明しました。水戸市周辺には大きな陸軍飛行場が三つあったことに来場者は驚いていました。

一つ目は、「陸軍水戸飛行場」で、戦後も米軍の射撃場があった場所、現在は「国営ひたち海浜公園」となり、

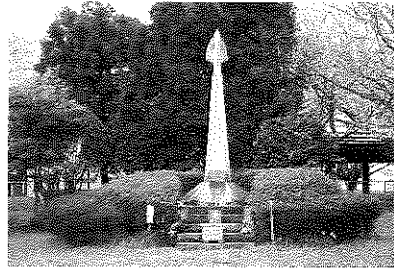


陸軍水戸飛行場跡 (昭和24年1月12日米軍撮影)

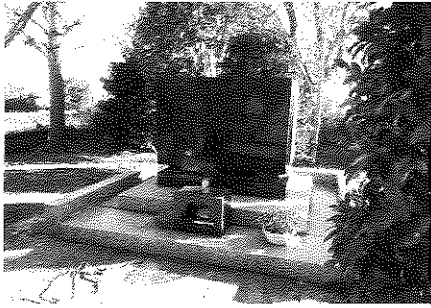
〔国土地理院地図・空中写真閲覧サービスから抜粋〕

多くの人が花を楽しみむ場所です。若者は初めて知り、驚いていた表情が印象に残っています。

二つ目は「陸軍鉦田飛行場」で、陸軍航空部隊初の双発軽爆撃機による特攻隊となった「万葉隊」が厳しい訓練を行い、昭和19年10月22日に特命を受けて飛び立ち、立川・各務原経由で比



陸軍水戸飛行学校跡の「つばさの塔」



陸軍鉦田飛行学校顕彰碑

島へ向かったことで知られています。

現在は茨城鉦田メロンなどの産地となっています。現地調査に行くと、記念碑がどこにあるのか地元の人さえ知らないのが実情であり残念です。

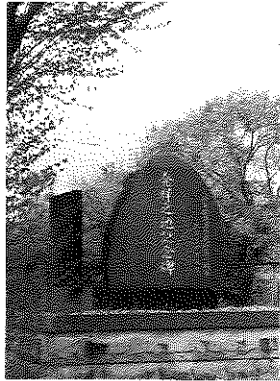
三つ目は、茨城県つくば市の西方に、昭和14年3月に建設された「陸軍西筑波飛行場」です。この地は、当初は「陸軍航空士官学校西筑波分教場」とされ、昭和17年2月に石油資源確保のためのパレンバン空挺降下作戦を実施した「第一挺進団」の訓練飛行場で、わが国唯一の「滑空飛行第一戦隊」第19052部隊が所在した場所です。

またこの飛行場には、「戦局が厳しくなった昭和20年2月中旬にレイテ湾敵船舶攻略戦に参加していた四式重爆撃機「飛龍」装備の飛行第62戦隊(師(威)第9908部隊)が戦力回復の為、配置されています。この重爆撃部隊は、昭和20年4月8日には主力を以って西筑波飛行場を出発、太刀洗飛行場を経由して沖縄特攻作戦に参加しています。そして6月下旬太刀洗から西筑波へ帰着し終戦に至った(陸軍航空部隊略歴其の1)から抜粋」と記されています。残念ながらこの事実を知る人は会場ではお目に掛かれませんでした。現在はゴルフ場の最高品質の芝として知られる「つくば芝」の生産地になっています。



陸軍西筑波飛行場跡

(昭和23年10月26日米軍撮影)〔国土地理院地図・空中写真閲覧サービスから抜粋〕



陸軍滑空飛行第一戦隊発祥之地記念碑

(3) ペリリュウ島で戦った水戸歩兵第二聯隊

郷土の誇りの精強部隊として知られる水戸歩兵第二聯隊がペリリュウ島で激戦を戦った戦闘概要説明等を行います。生存して復員された34名の方々が中心となって遺族会が設立され、幾

度となく現地へ赴いて収集された遺品の一部も展示され、多くの市民に新たな感動を与えることができました。

また当時の事情を知る方々の来場もあり、「復員された方も高齢のため今もなお語り続ける人は数名となった：」とのお話を伺いました。精強水戸歩兵第二聯隊の苦闘の実態とその遺品を、史実として正しく若者達にも語り継ぐことの重要性を強く感じました。

(4) 風船爆弾の概要

風船爆弾は、昭和18年8月大本営が本格的な開発（登戸研究所）を決定した世界でも珍しい長距離兵器でした。戦局が悪化したこの時期に米本土に脅威を与える唯一の戦略兵器として極秘に準備されたため、その概要を知る人は少ないと言われます。北茨城市歴史民俗資料館（野口雨情記念館）2階のギャラリーでは常設展示が行われています。今回の展示は、茨城郷土部隊史料保存会が保有する断片史料や北茨城市歴史民俗資料館の史料及び鈴木俊平著『風船爆弾』を参考に現地確認した写真などを展示しました。

風船爆弾は、「番号試験」（ふ号作戦）に関する大本営命令によって命ぜられました。「ふ号作戦」は冬場に高層を流れるジェット気流を日本人が発見して実現したこともあまり知られていませんので、その内容もパネルで説明し

ました。

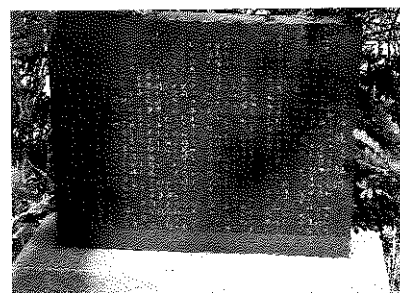
気球部隊は、昭和19年9月26日に聯隊本部及び通信・氣象隊・聯隊材料廠と第一大隊を大津周辺に置き、第二大隊は千葉県一宮、第三大隊は福島県勿来で編成されました。

直径10mの和紙とコンニャク糊でつないだ気球が使われ、その気球は、当時の大劇場（国際劇場、日本劇場、宝塚劇場、国技館）などで女学生等により製作されています。昭和19年11月3日～翌年4月初旬までの間に総数9300個が放球され、気球の飛行高度約8000～12000mの高度を維持する装置を使用し、東京・サンフランシスコ間を2～4日（平均約50時間）程度で到達できたと記されています。

風船には15kgの爆弾1個、5kg焼夷弾4個と高度保持装置、高度調節に使う砂囊などが装備されていました。米国に到達した風船爆弾は、飛翔目撃・爆発・山火事生起・不発気球捕獲など総数は387件、爆発及び爆発に準ずる混乱は113件あり、そのうちオレゴン州では6名の死亡が確認されています。（鈴木俊平著『風船爆弾』）

(5) 戦艦大和の最期の概要
戦艦大和は、昭和20年4月6日沖繩に向けて「海上特攻隊」として出撃し、翌日7日、鹿児島・坊ノ岬沖で敵の爆撃機や戦闘機の空襲を受けて午後2時

分に爆沈（国立公文書館資料）した。この戦艦大和の出撃時、第二艦隊軍医長が寺門正文少将で、茨城県東海村出身であることから、今回の展示になりました。戦艦大和に同行した海上特攻第二水雷隊旗艦矢矧とともに、370分の1模型を展示しました。史料とし

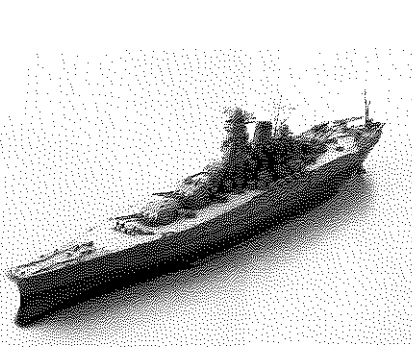


風船爆弾放流地跡の碑
碑文には、当時この地にあった各種施設等についても説明されている。



浦長浜地区の放球台の跡の現状
直径10mのコンクリート製の放球台には水素を充填するための装置があった。

ては、国立公文書館アジア歴史資料センターに残る「戦艦大和戦闘詳報」に詳細が残されています。



戦艦大和の370分の1模型(小田島建夫氏作製)

3 おわりに

今回は、茨城郷土部隊史料保存会が勝田駐屯地防衛館で保存する約1千点の史料の一部約百点を展示しただけでした。多くの地域の方々のご来場を頂きました。その際に子供や孫を連れてくればよかったと女性グループが漏らされた一言に勇気を頂きました。

郷土部隊史料の収集確認は断片的なものが多く、いかにして纏めて語り継いでいくかは、今後とも県との連携を含め、検討を続けなければならないと思っております。
（編集 勝田駐屯地防衛館に関して、表紙裏に記事、写真を紹介しています）